

学校評価シート

＜学校経営方針の重点＞ 1 学力向上, 2 健全育成, 3 組織運営・人材育成

項目	経営目標	本年度の重点	具体的な方策	評価	分析結果	改善策	学校関係者評価記入欄		学校の見解と今後の方向性
							評価	コメント	
1 学力向上	◆授業規律及び基礎・基本の徹底  ◆生涯にわたり、主体的・協働的に学び続ける力の育成	●「授業の指針」に基づく、力の付く、学びがよいある授業の実施  ●家庭学習の促進	①チャイム始業・チャイム終業及び礼に始まり礼に終わる授業の実施	A 8	チャイム始業・チャイム終業の意識は、生徒・教員ともに高く、概ね実行できている。本校の落ち着いた学習環境・生活環境の基盤となっている。	始業・終業の挨拶と礼までしっかりやらせるよう、指導のレベルを上げていきたい。	A 10	授業の間の休み時間に、各学年のフロアーに教員がいること、授業前には教員が教室に入っていることなどは、教員にとっては大変だと思うが、子供たちにとってはとてもよい。始業と終業の挨拶の質を上げていけると更によい。	今後もチャイム始業・終業を徹底していく。始業・終業の挨拶の指導にも力を入れていく。
			②放課後及び長期休業中の補習学習の充実(数学)	B 7.4	長期休業中の補習は効果があった。家庭学習ノート未提出生徒のフォローもできている。外部委託のステップアップ事業及びスタディアシスト事業では、生徒を掌握しきれないという課題が見られ、教員が巡回するなどに対応した。	時間のない中、できる限りの取組を行ってきた。定期考査前の質問教室などを増やすことについて、今後検討していく。	A 7.5	外部委託の先生との連携がうまく取れるとよい。あくまで希望制の補習ではあるが、学力の定着が十分でない生徒に「招待状」を渡し、参加を促すという取組は、よいのではないかと。	外部委託の事業についての課題は、校長会と市教委で共有し、策を講じていく。
			③主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善	B 7.1	校内研修や管理職による授業観察は効果を感じている教員が多く、取組について否定的な意見はない。自己申告書の面談も有効に活用し、教員の授業力向上を推進したい。評価数値の低さは、教員の意識の高さゆえと考える。	取組に対しては肯定的であるため、より効果を上げられるよう改善していく。授業観察の際の「授業PRカード」への記述をより具体的にしていくことで、助言の効果を上げていく。	A 9.4	研修を継続して行うことで、教員としてのスキルは上がっている様子が伺えた。学校として目指すレベルが高いので負担は大きいと思うが、効果は上がっていると思うので、より充実させてほしい。	今後も校内研修や授業観察を通して、教員の授業力向上を進めていく。
			④考査の範囲を記したシラバス配布及び家庭学習ノート等点検・評価	B 7	家庭学習ノートは、こなすことが目的になってしまっている面もある。学年によって点検基準や内容の指導に差が見られる。シラバスは意義をしっかりと伝え、学校として統一した取組にする必要がある。	家庭学習ノートに取り組むことが学習成果につながるような工夫を学校として行い、更なる動機付けを行っていく。シラバスは、定期考査の範囲をあらかじめ周知することができる。中間考査後に、直ちに期末考査の範囲を知ることができるため、計画的な家庭学習の促進に有効である。様式や配布方法を検討し、学校として統一する。	A 9.1	家庭学習ノートの取組は、家庭環境や個々の状況により取組の質が変わってくると思う。保護者との連携を深められるとよい。教員が丁寧に見ているので、生徒はがんばれるのではないかと。	生徒が、より意欲的に取り組める取組を検討していく。
2 健全育成	◆社会において自立的に生きる力の育成  ◆いじめや不登校への対応	●よりよい社会人になるための望ましい習慣の形成  ●教職員と生徒との信頼関係の強化及び相談体制の充実	①一小及び四小との連携による9年間を見通した習慣の形成	B 6.8	生徒会、挨拶、清掃活動などについて連携が図れている。情報共有も行えた。取組について否定的な意見は出ていない。評価数値の低さは、教員の目標の高さの表れと考える。	具体的な目標を共有し、手立てを協力して実施して、成果を検証していくよう、引続き小学校にはたらしめていく。	A 10	小学校との連携の必要性についてあまり考えたことがなかった。一小と四小との特色の違いもあり、連携をとることの大切さが理解できた。千ヶ瀬だけ、第二支会になってしまうので、その点が気になる。	課題や取組をより具体化し、より有意義な連携になるようにする。
			②教職員による生徒への「挨拶プラス一言運動」の実施	B 7	「プラス一言」は難しいが、教員は意識して行っている。生徒との良好な関係が築けている。生徒会も積極的に「挨拶プラス一言運動」を展開している。	精神的に取り組んでいるが、挨拶そのものが身に付いていない生徒もいる。挨拶の大切さを理解させる指導が必要である。授業時の礼などを通して指導を徹底していく。	A 10	以前からよく挨拶をしてくれる。外で会っても必ず先に生徒から挨拶をする。登校途中で挨拶をする生徒が増えてきている。	挨拶のできない生徒もいるため、その大切さや意義を伝える教育を引続き進めていく。
			③全教職員による「いつでも誰にでも相談しやすい雰囲気、普段からある。数値が低いのはそのためであると考える。」の実施	B 6.5	いつでも誰にでも相談しやすい雰囲気が、普段からある。数値が低いのはそのためであると考える。	誰にでも相談できるという意識付けをより強めるため、「いつでも誰にでも相談週間」を昼の放送等でアピールする。	A 9.9	普段から、生徒が担任に限らず誰にでも相談ができることがとても大切であると思う。自分から相談できない生徒への働きかけが大切である。将来的には自分で対応する力を育てることも必要である。	言葉を核とし、生徒の心に寄り添う教育を今後も推進していく。
			④休み始めの迅速・組織的な対応等による不登校問題への対応	A 8	副担任との連携により、欠席者への連絡が徹底されている。放課後の担任から欠席者への連絡も密に行われ、不登校生徒が少ない要因となっている。特別支援部を中心に、スクールカウンセラーとの連携も図れている。	特別支援部を中心に、特別な支援を必要とする家庭や生徒に対するアプローチの検討を、今までどおり丁寧に行っていく。	A 10	不登校になる前に連絡をして、対応することにより、不登校にならずに救われている生徒がいるはずである。	今後も、特別支援部を中心とし、生徒の課題に寄り添っていく。
3 組織運営・人材育成	◆主体的に課題を解決し、着実に成果を上げ続ける組織・人材づくり	●経営計画の実施に向けた協働体制の確立  ●経営改善に資する学校評価  ●チームとしての対応力の強化	①教育目標で中核とした資質・能力の育成ー「学校のグランドデザイン」の活用ー	B 6.9	グランドデザインによって、学校の目標が俯瞰できる。各行事等の要項にグランドデザインとの関係を記すことで、全体の目標と個々の取組のつながりが明確になった。教員がもっとグランドデザインを活用すべきとの思いから、評価数値は低めだが、教員の意識の表れと捉えている。	今まで以上に、各取組においてグランドデザインを活用するとともに、生徒の意識を高める工夫を行っていく。	A 9.7	グランドデザインに沿った教育の成果が地域での生徒の様子からも伺える。グランドデザインは、目指す教育が具体的に分かり、とてもよい。	グランドデザインの保護者への啓発も進め、家庭と連携した取組にしていく。
			②学校経営計画に即した自己評価及び対話を重視した学校関係者評価の実施	B 7	対話重視の学校関係者評価は、直接意見を聞くことができるため、課題解決に大変効果的である。評価数値は低めであるが、内部評価の中で批判的な意見はない。学校運営連絡協議会と直接関わられる教員が限られていることがその要因と考える。	今後も、対話型の学校関係者評価を実施していく。	A 9.6	対話形式をとる以前に比べると格段によく、効果も着実に上がっている。この形式で行うことにより、学校のこともよく分かり、学校がより近く感じられる。	今後もこの形式を継続していく。
			③目標共有、役割分担、調整・統合の各機能を高める幹部会及び運営委員会の実施	B 7.3	学期中の職員会議をなくし、学年会を確保したことで、実践的な技路運や意思の疎通がより行えるようになった。運営委員会と学年会が有機的につながり、双方向の情報伝達がより密になった。	学年会と運営委員会の有機的なつながりが、学校の柱となると考える。これを意識して学校経営を行っていく。教員数減少傾向があるため、組織の見直しも検討する。	A 10	最近では、教員も多忙で大変そうであるが、組織的によく動いていると感じた。	今後も、学年会・幹部会・運営委員会を軸に、目標共有、役割分担、調整・統合を行っていく。
			④新学習指導要領に向けた準備	B 6.6	「特別の教科 道徳」は、研究を通してだいぶ進んだ。今後は、各教科の研究を深めていく必要がある。	教科部会がより機能するよう、体制を整える。また、運営委員会だより「思いつくままに」を共通の資料として活用していく。	A 10	信頼してお任せしたい。	信頼に応えられるよう、全力で取り組んでいく。